

假
譯



一九四二年二月十二日

第六〇三六號

赤十字國際委員會

社
宛

蘭領印度政府ハ貴社ニ對スル拙電第五六四三號ニテ申進タルトコロ
ニ依リ船舶派遣ニ依ル「オブテンヌールト病院」ノ衛生人員ヲ避難
セシムル件ニ關シ提議ヲナスコトヲ我等ニ通報越セリ 我等ハ本件
ニ關シ貴國當局ニ對シ陳情スベシ 貴社ノ御援助ヲ得レバ幸甚ナリ



COPIE

OT GENEVE 134 39 12 1210

DLT CROIXROUGE JAPONAISE SHIBA PARK TOKYO

GOUVERNEMENT INDONEERLANDAIS NOUS FAIT SAVOIR
PROPOSE FAIRE EVACUER PERSONNEL SANITAIRE NOTRE
5643 PAR ENVOI NAVIRE HOPITAL OPTENNOORT STOP
FAISONS DEMARCHES DANS CE SENS AUPRES AUTORITES
JAPONAISES SERIONS HEUREUX AVOIR VOTRE APPUI
INTERCROIXROUGE 6036

日
本
赤
十
字
社

(陸普)

副官ヨリ株式會社大阪鉄工所櫻島工場長宛通牒

(兵器本部大阪陸軍造兵廠經由)

三月十六日附櫻島發第七六號ヲ以テ御照會ニ係ル首

題ノ件許可セラレシニ付承知相成度通牒候也

追テ出入ニ際シテハ時局柄秘密保持ニ関シ特ニ留意ア

リ度申添ヘ候

陸普第一七七七號 昭和拾七年參月廿五日

副官ヨリ憲兵司令部本部長宛通牒

株式會社大阪鉄工所櫻島工場長ヨリノ出願ニ係ル首題

ノ件ニ関シ左記ノ通許可セラレシニ付通牒ス

記

一、工場出入者之國籍 中華民國人

二、工場出入者之身分 大連市山縣通大連汽船株式會社

水夫長以下普通船員二十二名

三、出入之目的 當工場船員所之風呂ニ入浴ノ為メ

四、出入之期間 自昭和十七年三月十七日 至昭和十七年三月廿七日

五、出入之範圍 出入通路ヲ指定シ作業場内ニハ絶対ニ 出入ラシメス高出入ニ際シテハ嚴重監

視スルコト

陸普第一七七七號昭和拾七年參月廿五日



軍務

軍務部

兵器本部經由
大阪陸軍造兵廠經由

櫻麻發第七六號
昭和十七年三月十六日

二三九

昭和十七年三月二十三日
午前六時

大阪陸軍造兵廠
經由第二一
昭和十七年三月十六日

陸軍部
17.3.20
236
軍務部

陸軍大臣 東條英機 殿

外國人工場出入セシメ度件御願

陳者今般大連汽船株式會社所有貨物汽船鞍山丸修理ノ爲入渠可致候處同船ニハ普通船員トシテ中華
民國人二十二名乘組居候
就テハ左記ノ通り工場出入爲致度候間何卒御許可相成度奉願上候

記

工場出入者ノ國籍 中華民國人

工場出入者ノ身
分又ハ職業氏名
大連市山縣通 大連汽船株式會社
水夫長以下普通船員二十二名 (別紙ノ通り)

工場船員附所ノ風呂ニ入浴ノ爲メ
自昭和十七年三月十七日至昭和十七年三月廿七日

陸軍部	昭和十七年三月二十日
兵器本部	經由第一四三號

七

出入道路ヲ指シテ有難物内ニハ絶對立入ラシメズ尙出入ニ際シテハ
監視ヲシテ嚴重監督可爲致候

一 出入許否ニ對スル工場監理官ノ意見

一 差支ナキモノト認ム

一 出入許否ニ對スル大阪陸軍造兵廠ノ意見

株式會社大阪鐵工所櫻島工場主任
陸軍監督官 田中政十郎

大阪陸軍造兵廠ノ意見

差支ナキ意見

陸軍兵器本部ノ意見

差支ナキ意見



株式會社大阪鐵工所

汽船鞍山丸乘組員名簿

職名	氏名	生年月日	本籍地
水夫長	馬茂德	五五才	河北省天津縣鹹水沽村
大工	嶺仲元	四〇	全 天津縣大沽村
舵夫	龍仁堂	四七	山東省榮成縣西龍家村
全	陳儒厚	四五	全 鞍山縣珠環村劉莊
全	陳傳福	二二	全 鞍山縣珠環村崎山所
全	林運	二九	河北省天津縣鹹水沽
甲庫番	劉玉長	四六	全 天津縣南台村
水夫	劉有	四五	全 天津縣大沽村
全	李盛章	二九	山東省臨沂縣車王店
全	袁正良	二四	全 榮成縣落鳳崗
全	袁仁珍	二三	全 榮成縣落鳳崗村
水夫見習	馬兆祿	二三	全 文登縣後島村

株式會社大阪鐵工所

全	全	全	石炭夫	全	全	全	火夫	副鐵香	機庫香	三油	二油	火夫長	甲飲夫
張	王	王	尹	周	李	宋	鄭	劉	殷	王	徐	侯	
振	守	紹	逸	廣	培	春	榮	和	鳳	鳳	玉	敬	
東	田	增	芳	油	發	祿	生	貴	陳	樓	成	發	齊
三三	三三	二五	二九	二七	二六	三一	二二	四一	三五	四〇	五二	四九	二五才
全	全	全	全	全	全	全	山東省德縣桑園鎮	全	全	全	全	河北省滄下四大沽	山東省文登縣董家庄村
曲埠縣袁家庄	單縣張庄	威海衛揚亭梅家溝	榮成縣岳家庄	掖縣城內	濰萊縣龍山店	父登縣威海衛李齊村	天津縣西大沽本街	天津縣大沽	天津縣大沽	天津縣大沽村	天津縣大沽		

株式會社大阪鐵工所

火夫見習	梁	壹	環	山東省父登縣項子村
機炊夫	鄭樹金	四	二	河北省天津縣海下西大沽
司廚長	小田直	九	明治三三 一七	東京市墨江區金杉濱町二五
料理人	李吉昌	四	五	山東省濰萊縣大辛店西樹齊院
給仕	姜國福	二	九	牟平縣南朱港堡
全	劉勝春	二	〇	即墨縣南屋村
全	唐本斗	二	一	牟平縣金山堡村
				合計 三五名

三月廿五日

第 〇 三 號

30

救本密第二七號一
 昭和十七年三月二十日
 陸軍次官 殿
 三月十八日官房第一四五三號達ニ依リ左記ノ通救護
 班ヲ佐世保海軍病院諫早病舎ニ派遣可致候條
 及報告候也

拾年保
二四號

陸軍省
17.3.23

日本赤十字社副社長

陸軍省
17.3.23
課長

第三四七	班名	佐賀	支編	組任	書	記	為	長	護	使	丁	計	三	陸軍	院	諫	早	病	舎	午	三	月	廿	五	日

記

為

長

護

使

丁

計

三

陸軍

院

諫

早

病

舎

午

三

月

廿

五

日

陸普 副官ヨリ大日本産業報國會々長平生鈆三郎へ通牒

三月十一日附産技發第一六號ヲ以テ大臣宛願出ニ係ル首題ノ件秘
密個所ヲ除キ願出ノ通り許可セラレタルニ付現場軍部監督官ノ指
示ニ據ヒ細部連絡ノ上撮影セラレ

追テ公開前檢閲可致ニ付承知相成度
陸普 第一七七一號 昭和拾七年三月廿四日

陸普 副官ヨリ兵器本部總務部長、航空本部總務部長へ通牒

首題ノ件大日本産業報國會々長平生鈆三郎ヨリ別紙ノ通り願出有
之秘密個所ヲ除キ許可セラレタルニ付依命通牒ス

陸普 副官ヨリ東京芝浦電気株式会社、日本鋼管株式会社、中島飛行機株

式會社各社長へ通牒

今般大日本産業報國會ニ於テ異常防止願出ノ目的ヲ以テ文化映畫

陸普



「怪我」ヲ製作ノ爲、別紙ノ通り貴社工場内映畫撮影方願出有之
秘密個所ヲ除キ監督官指導ノ下ニ撮影方許可セラレタルニ付可然
取計相成度候

陸軍第一七七七號 昭和拾七年參月廿四日

陸軍

產技發第一六號

昭和十七年三月十一日

東京市神田區神保町二丁目十七番地

大日本產業報國會

會長 平生 凱三郎

陸軍大臣 東條英機 殿

映畫撮影之件申請

今般本會中央本部事務局技能部ニ於テ左記ニ依リ災害防止映畫「怪我」ヲ製作致度候ニ就テハ特別ノ御詮議ヲ以テ撮影御許可相成度此段及申請候也

陸軍

工場労働者の安全

一、目的

本映画ハ工場ノ安全装備ト勞務者ノ安全思想ヲ鼓吹シ災害防止ニ就テ機械装備ノ實際ヲ詳細ニ検討シ産業人ノ生活態度ヲ啓蒙シ以テ物的人的の兩面ノ安全性強調ニヨツテ時局突破ノ増産ト能率昂揚ニ資セムトス

二、撮影希望場所

1 横濱市鶴見區末廣町二丁目四番地 十日間

2 東京芝浦電氣株式会社 芝浦支社 十日間

3 川崎市渡田 十日間

日本鋼管株式会社 川崎製鋼所 十日間

4 東京府北多摩郡武藏野町大字西窪六五〇番地 十日間

中島飛行機株式会社 武藏野製作所

三、撮影希望日時及期間

1 東京芝浦電氣株式会社 自三月廿五日 自午前十時至午後四時

至四月三日 自午前十時至午後四時

十日間

2 日本鋼管株式会社 自四月一日 自午前十時至午後四時

至四月十日 自午前十時至午後四時

十日間

3 中島飛行機株式会社 自四月五日 自午前十時至午後四時

武蔵野製作 所至四月十四日 自午前十時至午後四時

十日間

四、撮影場面

1 東京芝浦電氣株式会社芝浦支社工場内機械ノ局部撮影(工場別ト機械種別)

一五番工場ノB 自動機ベルトノ安全カバー

二七番工場ノD 35 プレーナノ安全装置

三七番工場 グライダ(自動ヤスリ)ノ安全カバー

四七番工場ノ一部 附廠移動撮影

五八番工場ノF 23 ノツチングプレスノ安全カバー

六八番工場ノニ シヤー安全装置

七木型工場ノ一部 帶鋸機、縦鋸機、鉋機ノ安全カバー

八鍛冶工場ノ一部 爐口ト鍛冶作業

2 日本鋼管株式會社川崎製鋼所

一轉爐 二平爐 三壓延作業所

3 中島飛行機株式會社武藏野製作所

工場所屬厚生施設（地上撮影）

撮影個所内譯

青年學校内武道場、實習室、運動競技場、テニスコー

ト、従業員住宅及寄宿舎、修養道場

五撮影關係者

東京市麴町區紀尾井町參番地

加治商會（映畫製作業）所屬

撮影者 佐藤清美

演出者 山下元廣

製作事務 木村利一

其ノ他撮影助手、照明係員等七名

六、使用撮影機及臺數

ノバルボ撮影機 一臺

2、アイモ撮影機 一臺

モ中興院、明治堂、定會、演劇、演習、演習、演習

一、新劇、二、新劇、三、新劇、演習

五、日本、演習、演習、演習、演習、演習

八、演習、演習、演習、演習、演習、演習

十、演習、演習、演習、演習、演習、演習

六、八、演習、演習、演習、演習、演習、演習

以上

演習

陸軍省 第一六號 第一〇〇〇號

昭和十七年三月十一日



東京市神田區神保町二丁目十七番地

大日本產業報國會

會長 平生 鈞



陸軍大臣 東 條 英 機 殿

映畫攝影之件申請

今般本會中央本部事務局技能部ニ於テ左記ニ依リ災害防止映畫「怪我」ヲ製作致度候ニ就テハ特別ノ御詮議ヲ以テ撮影御許可相成度此段及申請候也

日本國會議員友會誌記

一、目的

本映畫ハ工場ノ安全裝備ノ勞務者ノ安全思想ヲ鼓吹シ災害防止ニ就テ機械裝備ノ實際ヲ詳細ニ檢討シ産業人ノ生活態度ヲ啓蒙シ以テ物的人的兩面ノ安全性強調ニヨツテ時局突破ノ増産ト能率昂揚ニ資セムトス

二、撮影希望場所

- I、横濱市鶴見區末廣町二丁目四番地
- II、東京芝浦電氣株式會社
- III、芝浦支社
- 2、川崎市渡田
- 日本鋼管株式會社
- 川崎製鋼所

- 3、東京府北多摩郡武藏野町大字西窪六五〇番地
- 中島飛行機株式會社
- 武藏野製作所

三、撮影希望日時及期間

- I、東京芝浦電氣 株式會社
- 自三月廿五日 自午前十時至午後四時
- 至四月三日 自午前十時至午後四時
- 十日間

2、日本鋼管株式會社

東京芝浦電氣株式會社

自四月一日 自午前十時至午後四時

十日間

3、中島飛行機株式會社武藏野製作所

自四月十日 自午前十時至午後四時
自四月五日 自午前十時至午後四時
至四月十四日 自午前十時至午後四時

十日間

四、撮影場面（別冊筋書ノ赤線ノ項御参照ヲ乞フ）

I、東京芝浦電氣株式會社芝浦支社工場内機械ノ局部撮影

（工場別ト機械種別）

一、五番工場ノB 自動機ベルトノ安全カバー

二、七番工場ノD 35 ブレーナーノ安全装置

三、七番工場 グラインダー（自動ヤスリ）ノ安全カバー

四、七番工場ノ一部 俯瞰移動撮影

五、八番工場ノF 23 ノツチングプレスノ安全カバー

六、八番工場ノE シヤー安全装置

七、木型工場ノ一部 帶鋸機、縱鋸機、鉋機ノ安全カバー

八、鍛冶工場ノ一部 爐口ト鍛冶作業

2、日本鋼管株式會社川崎製鋼所

一、轉爐 二、平爐 三、壓延作業所

3、中島飛行機株式會社武藏野製作所

工場所屬厚生施設（地上撮影）

撮影個所内譯

青年學校内武道場、實習室、運動競技場、テニスコート、従業員住宅及寄宿舎、修養道場

五、撮影關係者

東京市麴町區紀尾井町參番地

加治商會（映畫製作業）所屬

撮影者 佐藤清美

演出者 山下元廣

製作事務 木村利一

其ノ他撮影助手、照明係員等 七名

六、使用撮影機及臺數

1、バルボ撮影機 一臺

2、アイモ撮影機 一臺

以上

企劃 蒲生 俊文
原案 武田 晴爾
指導

怪

(がけ)

我

脚本 鈴木 山
演出 佐 加
撮影 加
製作

木 下 藤 治

三

悠 元 清 商

卷

一
郎 廣 美 會

梗概

焦眉の急である生産力の増強は各職場の能率を最高度に發揮するに
る。工場災害は當の機械と人間に及ぼす損害は勿論、その頻発は工
場能率を著しく阻害する。手工業時代には極めて軽くすんだ工場災害
も、機械文化の発達した今日、その被害は著しく増大した。同時に
その安全運動も躍進した。
本映画は工場の安全装備と労働者の安全運動を強調し、災害防止に就
いて機械装備の實際を詳細に検討し、産業人の生活態度を啓蒙し以て
物的人的両面の安全性完備によつて時局突破の増産と能率高揚を謀求
した文化映画である。

(梗概終)

地 影 撮

埼玉縣小川町近郊

東京人造絹糸株式會社沼津工場 (工場内局部撮影)

王子製紙株式會社富士工場 ()

日本鋼管株式會社鶴見工場 ()

東京芝浦電気株式會社鶴見工場 ()

工場

熔鉱炉から送る熱鉄
液満する火花
(塩基性平炉)

スパー

近代産業は

兵器工場

出来上る砲身(三ノ木操縦)

スパー

兵器を作り

製パン工場

スパー

食糧を

染色工場

スーパー

衣服を

スーパー

住居を作る

タイトル

国防の軍需を満たし
国民生活を確保する
それが決戦下産業の
第一義である。

機械工場内

就業中の職工の顔

働く職場の群像と移動撮影
（明るい顔と朗かなテンポ

伴奏

機械のリズム
に乗った
朗かなテンポで

製缶工場

で携る作業振りを明るく
カメラで

急テンポで出来上ってゆく
製缶場面ニミカット

(アナウンス)

刻下の急務である生産力を充
充するには産業の凡ての設備を
最も能率よく働かせることが第
一の条件である

十分に整へられた工場の設備
とそれを扱ふ労働者の真剣な努
力が併さつてこそ始めて最高能
率は上げ得られるのである

一つ一つの職場が何の故障も
なく滑かに運んで居れば産業は
至極調子よく、物資はどん／＼

災害発生

突如鳴り渡る非常ベル

(以下廊下までカットバック)

で直わる)

とび込んで来て動カスイツ

千と切る職工

諸機械の運転止る

駈けてゆく職工達

友人の怪我を怒鳴られ駈け

出す熟練工

石柱左往する足足

病院廊下

手術室の標札から (Pan)

増産されてゆく

非常ベル

動カ

落ちる音

足音

叫声

災害現場

廊下に駆けつけた家族も知
人を省める事務員へ

後片付けと修理をしてゐる
傍では工場長と監督その他
に由呼び合つてゐる幾組

柱のボスター

『怪我は身の損國の損』

(パンダウン)

熟練工苦渋の面持で仕事を
してゐるが焦立って怒鳴る
然し傍の職工は怖気づいて

(アナウンス)

怪我は一人の損に止らない

怪我人自身と連なる家族は勿論
の事だが、それにつれて起る作
業の中止 機械の破損 職工全
体の気持にひびく不安等 一人

騒音

グルミーム

音楽とか

おせて

紙流く村

歩らぬ態

不安とエウウツに黙りこん

で仕事をしている白職工達の

顔

(F.O)

(F.I) 煙突に薄氷を煙

(Pan)

空の雲。

紙流く農村 (long pan)

表に板帖した紙を立並べて

ある家

前の流水で原料の繊維を叩

いてる男女の二人

男、過まつて指をつく

(up)

の災害の為に受ける工場全体の
能率の低下は計り知れぬものが
ある。

切れる ←

牧歌

糸繰る村

大仰に飛上る

女笑ふ

仕事場の紙漉作業

表の納屋口まで積上げた製

品を束ねて重ねてある指を

衝いた男 たりきに積んだ

ので束の山が倒れかゝる

男あわて、支へるが一緒に

倒れてしまふ

川端の女笑ひこける

束の中から顔を出す粗忽男

糸車を使って糸を繰ってる

(アナウンス)

産業の機構が幼稚な家庭工業

の時代にあつては 怪我は至極

軽くしてすんだ その上製産工

程が単純で工場の关联性もな

つたので一つの仕事を中断して

も全能率には殆ど影響しなかつ

た。

る農家

傍ではその糸で機を織って

ゐる

二人喋り合っている

前掛の端が紡績に捲込まれ

てゆく (up)

糸車動かなくなるので女は

気付いてそれを解かうとす

るが揃みこんで解けないの

で焦れ 前懸を外して紡績

の上に投げかけて立ってし

まふ

機端でその女が平気な顔で

或る場合には過ちさへも全く

気付かぬうちにすんで了つた



紙科工場

空

ランポのホヤを磨いてる

カメラ急激に(Pan up)

軒から空へ

大空に屹立する高圧線鉄塔

上方で工事中の工夫が蟬の

様に見へる(仰角)

途中の「危険」と書いた標

札(仰)

山から野末へ道かに連なる

鉄塔と電線の拋物線

唸る三三線のタイナモ

然し近代科学は産業の凡庸を
分野に於て目覚ましい進歩をと

けた

同時に災害の及ぼす影響と損

音
高く

タイナモの
唸り



剪断工場

(カメラ戸口迄退く)

戸口にかけられた標札

立入禁止 × × 製紙工場

(4P)

木材を割る大カッターの運

転 緊張した従業員の作業

泥状になつて出てくる紙料

パルプをトラックに積む場

面

トラックが這入つてゆく門

門標「××人絹工場」

織布工場

織布過程一カット

害も急激に増大した

紙すき場では笑つてすませた

怪我も 今日では道ちん生命に

因原する

機織
騒音

安全装置
各種

機械工場

糊付場の機械の運転と作業
する女工

女工の袖が捲取機に觸れさ
うに動く (仰)

運転する大小無数の機械の

間に立働らく職工の姿

(クレーン利用ラジ移動機影)

通路に面しレベルトギヤリ

ングの安全カバー

ここでは作業服の端が僅かに
捲込まれただけで命を失ひ工
場の全機能は一時停止する

今日の産業戦士の大部分は硝
煙燻る戦場に分らぬ危険と恒に
向ひ合つて働いてゐるのである

されば機械工場の危険から労
働者の身を守る安全設備と全産
業人の安全運動とは機械科学の

機械
騒音

切れる

木工場

傍と職工すれくへ往來する
る
10.1) して取除けた状態と取付
けた状態を示す
「木工部」の標札
帯鋸機の安全装置を前と全
じ(0.1) して二様を示す
フォレナーの安全装置
丸鋸機の安全装置へ矢印を
付らせて示す
縦鋸の木の逆行する様を標

進歩と歩調を合せて今日着しい
發達とつけたのである
・ 通路に面したベルトや齒車に
は洩れびく安全カバーがかけら
れてゐる
・ 鉋や鋸機にはこのやうな安
全装置が施されてゐる
・ 従業員の作業服への安全性を

プレス	パンチ
<p>自動式なパンチプレス<small>(0.4)</small>の作業</p> <p>を高速撮影にて示す</p>	<p>手を使ってやるパンチプレス<small>(0.4)</small>の熟練作業とその危険さ</p> <p>よって示す</p>

で示し作業者のプロテクタ
 ーの必要を画で現す
 各機に「手袋厳禁」の札を
 かけさせる

シマ一の安全装置を作業に
 よって示す

十分に考慮され必要な職場に備
 へられてゐる

この装置は安全と材料の圧へ
 とを兼ねたものである

熟練作業に過失は避け難い
 斯ういふ機械を自動的に安全な
 機械と取替へてゆくことが引
 いては能率増進の眼目になるの
 である

右のパンチ台のギヤーベル
トの安全装置の完備された
救台の併列を移動撮影

(F.0)

(F.1) 原始的な職場で獨りで仕
事をしている老爺(アジヤット)
その指先から顔面に歴然た
る傷痕がある(44)

このやうにして労働者の安全
を保証する安全装置を全産業部
門の總ての工場に完備せしむる
のふことは最早國家の要請なの
である

然し乍ら機械の装置が完備さ
れただけでは災害防止の徹底は
期し難い 機械の完全な設備に
これを加へ労働者の真摯な努力
が加はつてこそ始めて災害の根
絶が出来るのである

鍛冶工場

焼けた鉄を叩き直す老翁 (44)	(44) 熱火焰々たる加熱炉から	四五人掛りで大火着で引き出す熱鉄	クレーンで運ぶ熱鉄	大蒸気ハンマーの動き Pan	ハンマー手のハンドルの動	と方で大ハンマー上下する	床へ運ぶ熱鉄 数人で囲んで叩く	で叩くとする 一回でハン
------------------	------------------	------------------	-----------	----------------	--------------	--------------	-----------------	--------------

昔から工場に怪我はつきもの
と運命的に諦めてゐた そんな
考から叩き直さねばならぬに

、過ちも自分一人の怪我ですん
だ昔に比べて同じ作業でもこの
ハンマー把手の僅かの不注意は
熱鉄を囲む数人の仲間の運命を
決する重大事を引起すのである

音響・命
等同時録
音



クレীন
(工場内)

マー手緊張してハンドルと
握る

熱鉄と打つ大ハンマーの作
業

飛散する火花

鉄杖にクレীনのワイマロ

ーフを結びつける作業

その手 (仰)

結び終つて合図をする

クレীনモーター室のスパ

ツチマン緊張してスパツチ

を入れる

この一人の労働者のほんの僅
かの怠りが貴重な機械と幾人
の他人の上にとんな大きな災害
を引起す因モトとなつたであらう。

同時

捲き上げるクレーン
運び出すクレーン
その下では仕事をする他の
職工達と整列する諸機械
(フカン)
ワイヤーの掛け方不完全な
ためおれ始める (up)
天井を移動するクレーン
下の職工と機械
掲げてゆくワイヤー (up)
移動するクレーン
真下の職工数人 (フカン)
遂にワイヤー掲げて崩れ落

天井

ちる鉄杖 (up)

同時に非常サイレンの唸り

人々の叫喚の声

ダラリと下った空のワイヤ

1 (up)

Fo.

天井を修繕した器具を梁に

括えた竹箆に入れてゐる男

疲労の顔を拭って小瓶より

薬とのみ又続ける

(その斜のフカン)

真下で仕事をしてゐる職工

達・機械には安全装置完備

不注意な筈の括え方一つで、
百の安全装置の効も無駄にして

非常サイレン
叫喚

聲音

精錬熔鉱
炉 (鉄炉)

てゐる (UP)

(カメラ仰ぐ) 梁上の竹箆

竹箆据え方が悪いので震動

で揺れてくる

遂に揺れて覆り落ちる

天井裏の尨大な熔鉱炉へ

クレーンで大鍋の鉄湯が注

入される

サイレンと一緒に転廻する

炉

その度に大工場に飛散充満

する火花

しよふ

音響

サイレン

蠶のく半裸像の従業員

煙る蒙塵

塔鉋炉口の作業

サイレンの合図と共に監督

のホイッスルに依つて炉口

へ合金鉄を投げこむ半裸の

労働者の敏活な作業

炉の火焰をバツフにした

シルエットの裸像の活躍

差し込む斜陽と蒙塵の工場

内に潑洒する火花

鳴る晝食のサイレン

火花の一滴も猫肉体を貫くこ

の職場の危険さは既に砲火飛ぶ

戦線に通ずる されば監督の命

令一下 一糸乱れぬ緊張しきつ

た協同作業が要求されるのであ

る

、一人の不注意 僅かの怠慢ゆ

許されない

その事は時局下産業戦士の總て

に課せられる言葉である。

芝生

サイレン (up)

芝生に一人投げ出したやうに仰臥してゐる少年工

(フカン・ネロング)

帽子を顔にのせ仰臥してゐる少年工 (D、E)

村の牧場で牛を追つてゐる

同人の姿

はつとして起上る少年工 (up)

卓上のうなだれて萎れた花

の下で弁当を半はで着と投

食堂

ではその不注意や過失はどこから来るのであらうか 災害報告者と検べて多ては過失の大部分が労務者の精神的或は肉体的な疲労から来てゐる事を知る事が出来る 疲れた神経は仕事に能率を鈍らせる上に その仕事の持つ危険さにも鈍感にさせる この隙に災害は発生する

伴英

ブルミナー

工場内

けて蓋をして丁ふ職工(仰)
その横顔にD・Eで菓子屋の
店先で客に応接してゐる同
人の姿

体を屈して仕事をしてゐる
旋盤工

眼を凝す精密機械工

その職工が休憩時間、眼を揉
んで青空を仰いでゐる姿

(仰角)

疲れは病氣以外には仕事の種
類によつて異なる 長い時間と不
自然な姿勢でする仕事や 眼を
細かに一点に集める仕事などに
従ふものは休憩時間に疲れが神
経をよくほぐして置かぬばなら
ない

切れる ←

快適な
急ぎ足で

空に上るボール

フットボールに興する職工

の一群

キャッチボールに興する一

群

排球に興する女子群

(以上、カットバック)

工場のがラズに流れる明る

い西脚

工場内機械の間あちこちに

ピンポンに興する幾組

(フカン Pan)

音楽を奏する柱のスピーカー (up)

然し乍ら進歩した今日の工場

法は労働者の身を酷使する作業

は之と認めない 反対に益々労働

スピーカーより
流れる
音楽



門

映画館

溢れ出てゆく職工群

暗がりでもラムネをラッパ呑みしなから画に見入る客席の少年工 隣の少年工は蔑を煉らしてさへぬる

(カメラパンしてスクリーンを捕へ、前進して画面一杯になる)

勤條件は改善され 保護されてゆく

疲労の原因はむしろ職場から離れた後の無考へな生活から来る場合が甚だ多いのである 殊に増えた少年工や青年工の職場以外の生活は嚴重に指導されねばならない

・ 娯樂の撰択や休日の団体的訓練も益々必要になって来た

音楽

画面	団体使步	産業体操
画面はハイキングの場面と Wる	旗をかざして山を登る少年 工の一團 高らかな歌声 双輪部隊の出發	青年工の軍勢訓練 女子産業体操のマスゲーム (ロッキングとup) 少年工の団体労働体操 就業前の大工場全従業員 の産業体操(ミニカット)

殊に産業体操は工場的大小を
向はず必ず励行さるべき工場第
一課である
。國家の必要によつてこの部門

説明を和
に含め付
して次第に
進む

それにD・Eして
安全装置完備の機械の整列
と移動撮影した山のとWら
せる

に集められた夥しい産業戦士
その貴重な只一人にても災害を
おらしめてはならない 戦場の
怪我は「名誉の負傷」であるが
工場の怪我は「職場の恥」であ
る 機械の完備と労働者の精神
力が相衝つてこそ時局突破の増
産は遂行されてゆくのである。

(完)



副官ヨリ株式會社合同新聞社取締役社長へ通牒
三月十七日附申請ニ係ル首題ノ件別紙ノ通り
認可セラレタル付目下大阪市阪神パークニ於テ
開催セラレアル阪神電鉄株式會社ト協議受領ス
セラレ候

進テ貸與資料保管ノ責並所要經費ハ貴方
ノ負擔トシ期間満了後東京陸軍兵器補給
廠へ返納セラレ候申添候

陸軍第一八二〇號

昭和拾七年參月廿八日

上函獲兵器受領方ノ件

副官ヨリ兵器本部總務部長へ通牒
支那派遣軍報道部ヨリ陸軍省報道部宛
送付セラレシ大東亞戰爭上函獲兵器目下
岡山合同新聞社ニ貸與シテ四月三十日期間

陸軍

満了後東京陸軍兵器補給廠へ返納せしむル
ニ付受領方取計ニ依命有様トス

陸軍第一八二〇號

昭和拾七年三月廿六日



三〇號



昭和十七年三月十七日

岡山市東中山下四〇番地

株式會社 合同新聞社

取締役社長 橋本富三



陸軍大臣
東條英機

殿

展覽會出陳物貸下方申請

左記ニヨリ大東亞戰爭展ヲ開設シ赫々タル戰果ヲ仰ギ銃後國民ニ對シテ必勝ノ信念ヲ確保シ大東亞共榮圈確立ニ挺身奮勵セシムル指標タラシメ度ト存候ニツキ貴御保管ニカ、ル物件御貸下方御詮議相願度此段及申請候也

追而本件所要經費トシテ荷造運搬費及出陳中毀損紛失ニ對スル修

御貸下ニ關スル内規ノ條項確守可仕茲ニ誓約致候也

記

一會名 大東亞戰爭展

二會期 昭和十七年 自三月廿五日 至四月三十日 三十七日間

三會場 岡山市東山會館及岡山城天守閣

四指 標 偉大ナル戰果ヲ仰キ大東亞戰爭ヲ戰ヒ拔キ國家ノ雄渾ナル經綸ニ副
ハントス

五主催者 株式會社 合同新聞社

六觀覽者予想人員 岡山縣下ヲハジメ廣島、香川、島根、兵庫、鳥取、大阪等
各府縣ヨリ十五万人

七入場料 有料

大阪市 阪神電氣株式會社

四月廿四日迄

均所古阪等
阪神



大東亞戰爭展覽會

一、名稱——大東亞戰爭展覽會

一、會期——昭和十七年三月二十五日より四月三十日まで

一、會場——岡山市東山會館(第一會場)

岡山城天守閣(第二會場)

一、指 標——大東亞戰爭は御稜威の下皇軍の深遠にして雄大なる作戰により赫々たる戦果を收め、大東亞十億民族に春めぐり來るの慶びを載せて世界史の動向を定むべき意義を打ち樹てつゝあります。

この歴史的感激と脈々たる東亞建設の息吹きの中に必勝の信念を確保し、大いなる戦業を仰ぎ一億總進軍の逞しき事象を決戦態勢下の國民に展示して、啓蒙宣傳、以て銃後の

よる共榮圈確立に挺身奮勵せしむるの指標たらしめ、併せて國家の雄渾なる經綸に副はんとするものであります。

一、展 列

- 一、米英擊滅皇軍戰鬪關係資料
- 一、大東亞共榮圈建設資料
- 一、南方資源開發關係資料
- 一、亞細亞民族解放關係資料
- 一、北邊の護り關係資料
- 一、統後總力戰關係資料
- 一、國民教化鍊成關係資料 (以上第一會場)
- 一、歴史的南方關係資料
- 一、大東亞共榮圈の歴史的資料 (以上第二會場)

主催合同新聞社

大東亞戰爭展覽會出品兵器品目員數表

品目	員數	摘要
トンプソン自動短銃	一	
コルト拳銃	一	
ブローニング輕機關銃	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
コルト重機關銃	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
八一迫撃砲	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
小銃	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
同會彈	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
銃	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
拳銃	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
指揮刀	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
拳銃	一	泰皇島米國マリン隊接收兵器
小銃	一	舊英租界接收兵器

輕機關銃			蓄英野果銃彈兵器
重機關銃			米國北京マリン隊接收兵器
短波受信機			
一名稱	大東亞戰爭展覽會		美國北京マリン隊接收兵器
第一會場	岡山市東山會館(第一會場)		
第二會場	岡山城天守閣(第二會場)		
主催	株式會社合同新聞社		
貸與期間	自昭和十七年四月五日 至昭和十七年四月三十日		
責任者	合同新聞社取締役社長 橋本富三郎		
品目	自備品		

大東亞戰爭展覽會出品兵器品目員簿表

品目

要

陸軍密

副官ヨリ南方軍總參謀長へ通牒案

首題ノ件ニ関シ別紙豫定ニ依リ日本學術振興會ヲヨリ左記委員ヲ佛印及泰國方面ニ派遣セシメラルルニ付
特便宜供與方配慮相成度依命通牒ス

左

兼

日本學術振興會委員 厚生省衛生試驗所技師 黒野吾市

同 厚生省嘱託 藥博 木村雄四郎

同 厚生省嘱託 武部勝治

陸軍密第九二三號 昭和七年三月廿五日

副官ヨリ日本學術振興會學術部長へ

通牒案

三月九日附學第四八號ヲ以テ御依頼相成タル首題ノ件ニ関シテハ現地軍へ依頼致置候条此段及回答候也

南方軍へ通牒ニ飛行便ヲ以テ送付相成也

昭和七年三月廿四日 陸軍省醫務局醫事課 官房ヨリ

官房控

旅行地													旅行地				
サ	ユ	河	ル	ソ	ラ	河	モ	ラ	河	西	東	旅	次	滞	旅	次	滞
ラ	エ	内	ア	ン	オ	内	ン	ソ	内	貢	京	行	ノ	在	行	ノ	在
ワ			ン	ラ	カ		カ	ン				地	旅	日	日	旅	日
ン			バ	ラ	イ		イ	ソ				迄	数	数	数	迄	数
										二	二						
三	三	二	三	二	三	三	六	四	五								
チ	ベ	盤	コ	コ	ウ	チ	盤	ブ	カ	ブ	西	ダ	旅	次	滞	旅	次
ユ	ツ	谷	ラ	ン	ボ	エ	谷	ノ	ン	ン	貢	ラ	行	ノ	在	行	ノ
ン	ブ	ト	ト	ゲ	ン	ン	マ	ン	ポ	ベ	ン	ツ	地	旅	日	日	旅
ン	リ			ン	ン	イ	イ	ベ	ート	ン	ト	ト	迄	数	数	数	迄
一		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一					
二	二	一五	三	七	七	五	一〇	二	二	二	八	六					

馬車ハ時期
為早ノ意見



東京市麹町區霞ヶ關文部省內

日本學術振興會學術部

電話銀座571 { 5452番
學術部專用

學字
四八號

九不八

昭和十七年三月九日

日本學術振興會學術部長

林

春

陸軍次官殿

現地調査ニ便宜供與方依頼ノ件

本會ノ設置ニ係ル輸入醫藥品補充對策研究第五十小委員會ニ於テハ
今般研究ニ資スル爲、佛印、泰國及マレ一方面ニ次記ノ如ク委員ヲ
派シ、實地踏査ヲ行ハシメ度存念ニ有之候ニ就テハ、御差支ナキ限
リ現地御關係官憲連絡等何分ノ便宜供與方御高配賜ハリ度此段御依
賴迄得貴意申候

追而飛行機便乗ノ件ニツキ供與方特ニ御配慮煩シ度申添候

記

一、派遣委員

本會學術部輸入醫藥品補充對策研究第五十小委員會
委員 厚生省衛生試驗所技師 黒野 吾市



東京市麹町區霞ヶ關文部省內

日本學術振興會學術部

電話線座 57 { 5452 番
學術部専用

ニ
旅
程

(別紙ノ通り)

委員
同 厚生省囑託

藥博

武 木
部 村
勝 雄
治 四
郎





東京市麹町區永田町

陸軍省御中

ノ

同少部
子位在七
部若生村
一書也字

足守祥一

陸亞普

副官ヨリ本郷聯隊區司令官へ通牒案

左記ノ通事變死歿者葬儀執行ノ際昭和十三年陸支普第六七二號ニ依ル三長官ノ供物竝代拜ヲ貴部ニ於テ取計相成度依命通牒ス

左記

一、死歿者

軍屬日本赤十字社救護看護婦

長谷川

トク

二、葬儀日時

三月二十八日

午後一時町葬

三、葬儀場所

埼玉縣兒玉郡兒玉町國民學校

陸亞普第一六六號

昭和拾七年三月廿六日

副官ヨリ日本赤十字社副社長へ通牒案

三月二十四日附秘書第四〇一號申請ノ救護看護婦長谷川 トク葬儀ノ際三長官ノ供物竝代拜ノ件本郷聯隊區司令官ニ取計方通牒シ置キタルニ付承知相成度

陸亞普第一六六號

昭和拾七年三月廿六日





陸軍省
秘書第四〇一號
第一二二〇號

昭和十七年三月廿四日



日本赤十字社社長公爵 德川 圀 順



陸軍大臣 東 條 英 機 殿

事變死歿者葬儀執行ノ件

日本赤十字社第二百四十二救護班
甲種救護看護婦 長 谷 川 トク

右者北支那ニ於ケル陸軍病院ニ勤務中疾病ニ罹リ同院ニ入院加療ニ努メタルモ昭和十六年十二月十七日死歿ニ付左記ノ通り葬儀執行可致候條代拜者御派遣相成度御依頼旁此段及報告候也

左記

- 一 葬儀日時 昭和十七年三月二十八日午後一時町葬
- 一 葬儀場所 埼玉縣兒玉郡兒玉町 國民學校ニ於テ

日本赤十字社

寫

請書

故日本赤十字社甲種救護看護婦長谷川飛夕

救護看護婦長谷川ト夕

救護團體名 第百四十二救護班 月十七日

召集年月日 昭和十五年十二月十三日 二十日

配屬部隊名 開封陸軍病院 月十七日

配屬期間 自昭和十五年十二月二十四日 至昭和十六年十二月十七日 封

病名 腸チフス

發病年月日 昭和十六年十一月十七日

發病原因ト事及地 別紙事實證明書ノ通り

開封陸軍病院院長佐藤重三

開封陸軍病院附陸軍軍醫中尉小森肇

寫

事實證明書

開封陸軍病院(日本赤十字社第三回救護班)

救護看護婦 長谷川 卜夕

一、内地臺灣特發年月日 昭和十五年十二月十七日

一、事發地致着年月日 昭和十五年十二月二十二日

一、發病年月日 昭和十六年十一月廿七日

一、發病場所 北支那河南省開封

一、病名 腸チフス

右證明不

昭和十六年十一月二十五日

開封陸軍病院長陸軍軍醫大佐森本捨三

開封陸軍病院附陸軍軍醫中尉小篠 肇